回想 interview

それぞれの世界選手権。この経験を糧に次なる舞台へ

田添健汰

TAZOE KENTA

（専修大）

全日本選手権
混合ダブルスに5回
出場し、3回の優勝。
うち2回は、今世界大会優勝の
吉村・石川に勝利しての優勝。
国内トップの強さを誇る
ペアが世界に挑んだ。

敗戦から見えた景色

シングルスでも、ワールドツアーで李尚洙（韓国）らに勝利。地力はある。長身から繰り出す両ハンド攻撃は威力があり、加えてダブルスで勝ち上がる上で絶対に必要な、細かい台上プレー、カウンタープレーを得意としている。

「まさか代表に選ばれると思っていなかったので、驚いていました。と、同時に、代表選手なのだから、『勝利』すること、結果が求められていることがわかりました。

世界選手権までにたくさん練習しましたし、たくさんの経験を積むことができました。その経験も私にとっては大きかったです」

代表初選出。高校からペアを組む前田美優（日本生命）とともに、アジア選手権を戦う。強豪らに勝利し、初代表で銅メダルを獲得。初代表ということを考えれば、銅メダルでも、合格点がつけられるのではないだろうか。もちろん本人は満足していないだろうが。

世界選手権。緊張はそこまでなかった、と振り返った。

「もっと緊張するかな、と思っていましたが、大会前は特に緊張しなかったです。しかし、試合開始1時間前になると、急に足が重くなったというか、何かを意識するようになっていました。試合が始まれば良い感じでプレーできていたので大丈夫でしたが…」

初戦はチェコのペアにフルゲームで勝利。スコアこそ接戦であるが、内容は田添たちのペースだった。

「ヨーロッパのペアはラリー戦が強い。ボールに威力があるので、距離を取って入れにきた両ハンド攻撃でも威力がある。そしてコース取りもよいので、どういう風に攻めていいかわからなくなる時がありました。

それがアジア選手権の時に感じたアジア選手に対する印象と、ヨーロッパ選手との差かなと思います。アジア選手は、台上が上手いというか、台上からの展開が多いので自分としてはやりやすいんです」

数センチ、数ミリの攻防

メダル決定戦。田添・前田組は、黄鎮廷・杜凱琹（中国香港）と対戦。1ゲーム目は4－8から挽回勝利した。2ゲーム目以降はリードするも、落としてしまい、結果、ゲームカウント2対4で敗戦。初出場となった世界選手権はベスト8という結果だった。

「内容は悪くなかったと思います。悪くなかっただけに余計に悔しいんです。6ゲーム目の9－9。相手のチキータレシーブがフォアサイドにくるのがだいたい読めていました。でもそれが取れなかった。それが今の実力だと思うんです。常にファインプレーをしないと世界のトップでは勝てない。そう感じました」

またこうも続けた。「ミックスダブルスは男子が頑張らないといけない。その面では何もできなかった。男子に攻撃されたら、パートナーは絶対に取れない。勝ち上がるに連れて、女子のレベル、ボールの質が良くなってきます。コースを外したり、ボール1個分であったり、数センチ、ミリ単位でボールのコースを変えていかないといけないと思います」

インタビュー時は冷静に話していたが、試合直後は珍しく、悔しさのあまり泣いていた。

ミックスダブルスは、日本の吉村・石川組が優勝。奇しくも、田添・前田組が全日本選手権で勝利しているペアである。

「全日本選手権とは全く違う吉村さん、石川さんでした。準決勝、決勝を見て、大事な場面で力を出す重要さ、そして、狙えるボールは、男女関係なく、狙っていかないといけない、と感じました。良い経験ができました」

世界との差は「少し」

ミックスダブルスという種目で、田添は初めて世界選手権を経験した。

「世界選手権前はもっと緊張すると思っていたし、もっと差があるかな、と思っていました。でも、意外と差はないな、と思いました。でも、その差を埋めるのが大変なんです。

普通、フォアサイドに打つのは怖く、私はミドルとかに打ってしまうのですが、強い選手は最後はフォアサイドに打ってくることがわかりました。男子シングルス決勝を見ていても、樊振東選手がゲームカウント1対3となった時に、今までのバックハンド主体の戦術から、フォアハンド主体の戦術に変えて、ゲームオールに追いつきました。最後は馬龍選手が経験の差で勝ちましたが、あの決勝戦はワクワクしたというか、感動しましたね」

世界選手権を経験して一回り大きくなった田添。その経験は、どんな参考書よりも役に立ったはず。もう一度、新たな気持ちで「金メダル」を追う旅に出かける。